平成１７年2月２１日
第１７７回『２１世紀塾』参考資料
（第１７回提言）

雨の三島を和傘でもてなそう

『２１世紀塾』代表世話人　小野　徹

【問題提起】

伊豆は日本一の観光地であり、ここを訪れる人の最大の楽しみは、富士山の雄大・優美な姿を見ることだろう。

ところが、残念ながら、富士山は一年のうちの三分の二は雲海に隠れてしまっていて、その雄姿をかいま見ることができない。

それどころか、中には「雨」にたたられる日も多く、お客様をもてなす側にとっては、申し訳なく、つらい一日になってしまう。

摩周湖のように、むしろ顔を出すことの方がまれであれば、「お客様があんまり美人なんで、恥ずかしがってるんですよ」くらいの軽口で納得してもらえるのだろうが、伊豆の玄関口で、富士・箱根・駿河湾を一望に見渡せるという「日本一の絶景」を誇りとし、売り物にしている土地柄としては、至極残念な思いがする。

「雨」が自分のせいではないとしても、来訪者からすれば、「期待していた景色は見えないし、足元も悪くて、その辺を見て回るのもしんどいから、足早に立ち去ろうよ」では、いち早くボランティアの「ふるさとガイド」まで創設して、「おもてなしの心」を標榜してきた「観光・三島」の名が泣く。

つまり、「３６５日、いつでも、どんな日でも、三島に、伊豆にお出で下さい」と誘客する以上は、三島人の責任として、来訪者に「雨の日の三島の楽しみ方」を提示・提案することが求められているといえる。

とは言っても、日本の雨・気候だ。

――例えば、

三嶋大社では雨の日は和傘を使っている

・ I'm singin' in the rain
Just singin' in the rain
――「雨に唄えば」

のように、雨を楽しむ、雨を面白がるところまではいかなくても、せめて小降りの時などは、漱石の「草枕」ではないが、「住みにくい世を、束の間でもくつろがせる」知恵が求められている。

四季折々さまざまな表情をみせる楽寿園

それに、そもそもが、三島は「水の都」だ。

考えるまでもなく、「雨」も「水」なのだから、三島が雨にも強くなければならないのは、理の当然だ。

勿論、その日がたとえ雨であっても、「晴れた日の三島から見る富士山は、こんなにすばらしい姿をしてるんですよ」といった映像が見られる屋根付きの「富士山ミュージアム」などは、「もてなし」の絶対条件だろうが、三島にも、佐野美術館や三嶋大社の宝物館など、天候に左右されない見どころもある。

高台でありながら水の湧き出る水の苑緑地

しかしながら、よくよく回りを見渡すと、むしろ、多少雨に濡れ、少し湿っぽくなった方が、情緒があっていい見どころもたくさんあることに気づく。

――例えば、楽寿園がそうだ。

それこそ春夏秋冬、小雨に濡れてシットリとした園内の散策は、まさにスモッグやホコリとはまったく無縁の「市街地のオアシス」で、清涼・清浄な空気はおいしいし、ミズキや、アオキや、ツバキといったみずみずしい木々の葉も、そこから滴り落ちる雨だれも、池の水面の波紋も、どこをとっても一幅の絵となって、傷ついた心？を癒してくれる。

隆泉苑の家屋は国の登録文化財建造物になっている

また、「水の苑緑地」や、佐野美術館

の回遊式日本庭園「隆泉苑」は、こじんまりとしながらも、えもいわれぬ程に美しいし、ブナやヒメシャラの生い茂る函南原生林下の「原生の森」の池端の新緑などは、同じ黄緑系でも、萌黄色・若草色・鶸色等、微妙に異なった色合いの若葉が、競うように萌え出でて、いわく立ち去りがたい詩情を見せる。

函南原生林散策の基地となっている原生の森

文学碑に垂れかかる桜川のヤナギも、広重の絵に出てきそうな風情があるし、考えてみれば、近年、源兵衛川に飛び交うようになつたホタルだって、梅雨時に飛ぶんだし、学名にもなっている三島梅花藻も、水の中にある。

しかし、現実に何とかしなければならないのは、雨の日の足元の悪さだ。

いかに「雨の三島もいいものですよ」と触れ回ったとしても、雨の日の「もてなし方法」は、本当に難しい。

勿論、雨の日の足元の悪さを、すべて消し去るわけにはいかないが、せめて、前に例としてあげた楽寿園に、「三島らしい」、そして少しは世間の話題にもなる雨具が用意できないだろうか。

例えば、「和傘」などはどうだろうか。

かつて三島は、徳川慶喜公に従って移り住んだ武士によって、和傘の一台産地となった故事を持ち、年配者によれば、広小路や水泉園などには、ズラーッと和傘が広げてあったということだし、これを現代風にアレンジして、番傘に「みしま」と書くことも、文字以外のデザインをしてもいいし、蛇の目傘に「三島らしい」文様を描くこともできる。

楽寿園の「せりの瀬」にはいつも水が絶えない

和傘の骨組は竹でできているのだから、重いことは重いかも知れないが、そんなに長い時間持っているわけではないし、大きな和傘であれば、二人が一緒に使う、それこそ「相合傘」のような楽しみもできる。

柿渋の塗られた油紙に落ちる「パラパラ」という音も、文明の利器に囲まれた生

活の中では、他では聞かれない心地よい響きがあるし、油紙が破れやすいという欠点の矯正などは、それこそ科学技術立国の知恵の使いどころだろう。

アーケードが取り払われてスッキリした中心商店街

たまたま、現在、三島の中心市街地では、電線地中化と併せて、商店街のアーケードの撤去が行われているが、この地域に「雨」がなくなるわけではないのだから、買い物客、通行人を濡らさない工夫も、必要だろう。

となれば、楽寿園だけではない。各々の商店にも、「三島の商店街にふさわしい雨傘」――例えば和傘（番傘・蛇の目傘）を置いたらどうだろうか。

借りていって、三島のどこかへ返す、預ける。

たとえどこかへ持ち去られてたとしても、三島の宣伝・記念になるくらいの気持ちで、各商店に「置き傘」を置く。

――そんなシステムが考えられないだろうか。

いずれにしろ、「雨」が多く、しかも「水」を売り物にしている三島だ。

観光事業にも、中心市街地の商店街の活性化の為にも、雨の日の「おもてなし」対策の立案が、急務となっている。

この際、皆んなで、知恵を出し合おうではないか。

春先には桜川のヤナギが芽吹く

ホタルが生息する源兵衛川